

昭和二十年八月九日

ついに長崎も焼野が原となつてしまった。忘れようとしても忘れきれない生き地獄の世界だった。午前十一時五分ごろ、これを最後に多くの友人と死別しようとは、誰一人知るよしもなく、神でなくて、誰が知るものか。原子爆弾という恐ろしい命取りによつて、人間的にも精神的にも大きな打撃を与えられている。私は、神、父母の恵みによつて、生死のさかいを生の方へと歩いてきたが、今こうして生きているのが、幸か不幸かわからない。傷つき倒れ、死の底へと迷える若い人々、息をしているのかわからない多くの国民たちよ、血に顔を洗い、悲惨な、むごたらしい姿をまざまざと目前に見て、私一人、ぽつねんとして生きていくことが、考えても考えても不思議である。

八月十日

野宿し、夕方まであちこち食を求めた。はじめて物ごいのような生活をした。生きていくには、こんなにしてまで生きて命をつながなければならぬのか。食を求める哀れな姿よ。にくい鬼畜生ともいべき米英を、撃たないままでは終われない。このかたき 必ずうつてみせる。焼けはててしまい、焼死した人々よ、安らかに眠れ。

八月十一日

朝、母が深堀から姉さんと歩いてきた。母であるからこそ、つらいことも忘れ、子のために、子の無事を心配してわざわざ来たのである。あの時は本当に親の愛情というものがひしひしと身にしみこみ、ありがたさ、うれしさでいっぱいだった。

深堀に母と一緒にかける道々、城山の学校にも行ってみたけど、話によると助かっている人は少ないようである。人々はごろごろ死んでいるし、傷つき倒れ、見るものことごとく哀れ、悲しむほかはない。深堀でほつとしたけど、晩の空襲で眠られなかった。

八月十五日

一億の国民は、天皇陛下の御心にただひたすら泣くだけであった。広島、長崎の二市がやられたので、国民の苦しみを思い、神の時代から保たれてきた国土を、永続させようという天皇陛下の深い御心により、政府はついに、涙をのんで和睦を申し出たのである。これから先、何年間生きるかわからないけど、多くの苦しみが重なる覚悟しなければならない。しかし、これくらいの苦しみは、特攻隊として日本の勝利のために体あたりをした人たちにくらべると、まだまだである。

八月十七日

多くの兵隊はだいぶ帰ってきている。フィリピン島の菊川さんたちも元気だろうか。ただ生きていてくれると、問題ないと固く信じる。今の気持ちとしては、あの人以外に求めようとする人はいない。しばらく時期を見て、お母さんにも話してみよう。しかし、自分としても、菊川さんが気に入るよう、できるだけの努力をして、すこしでもよくなるう。それに、爆撃にあつて以来、体の具合がはつきりしないし、今ごろになつて弱くなるのは情けない。うんと体を強くして、病氣一つしないように努めよう。何よりも父母ともに心配しているし、よくなるのが肝心だ。

